

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

日本の在来馬はいつからいたか

馬はいつ頃から日本人との付き合いが始まったのだろうか。

三世紀に書かれた中国の書、『魏志倭人伝』には「この国に牛馬、虎豹、羊鵲なし」という一節がある。この頃にはウシ、ウマ、トラ、ヒョウ、ヒツジ、カササギといった動物が、日本にはいなかったということである。

その後八世紀に書かれた『古事記』を見ると、スサノオノミコトがまだら毛の馬の皮を剥いだとか、オオクニシノミコトが馬の鞍に手をかけ、鎧に片足を踏み入れながら歌を詠んだ、などという話で、馬が身近なものとして登場している。では日本の馬は、どこから来たのだろうか？ いくつか説があるが、四世紀初め、朝鮮半島を経由して日本に上陸したモンゴル馬が始祖であろうという説が有力だ。それから、長い年月を経て日本固有の馬となったのだ。

ドサンコのルーツ

しかし、まだまだ北海道には馬がいなかった。北海道は馬の後進地だったのである。では、いつからか？

江戸時代、漁のために連れて来られた南部馬がいた。荷物を運搬する使役馬としてである。

しかし蝦夷に来る時は余裕があった船のスペースも、秋の漁期が終わって引き揚げる時に、漁獲したニシンをいっぱい積むため、馬を乗せる余地が無くなる。そこで漁夫たちは、そのまま

原野に馬を置き去りにして行った。まるで消耗品扱いである。

翌年、漁夫たちが再び戻って来て驚いた。厳しい冬の北海道である。おそらく置き去りにした馬は、凍死しただろうと思っていた。しかし馬たちは、雪の下にある大好物のミヤコザサを餌にして生きていた。オオカミに襲われることもなく、凍てつく冬の寒さにも耐え、何事も無かったように漁夫たちを迎えたのである。

こうしてニシン漁場に連れて来て、



ドサンコのルーツは捨て馬だった

サラブレッドだけが馬ではありません。農耕馬も北海道を支える立派な馬なのです。その代表が北海道和種馬です。北海道民は自分たちと苦勞をともにしてきたこの農耕馬を、「ドサンコ」とひとときわ愛情を込めて呼びました。しかし、この「ドサンコ」のルーツは捨て馬だらけです。



使役が終わると置いて行くことが常態化した。そのうち、春になっても顔を現さない、捨て馬のグループができて来た。次第に北海道の気候風土に適應するようになり、自然繁殖を繰り返して、野生馬となっていたのだ。

それが北海道和種馬、いわゆるドサンコのルーツである。

南部馬の血

ドサンコの体高は一二五〜一三五cmと小柄ではあるが、厳しい北海道の自然の中で鍛えられるうちに、丈夫な体特徴の馬となっていた。頑強で、持久力があり、小柄だが大人や重い荷物を載せてもビクともしないドサンコ。祖先の南部馬は、はるか源平の昔から東国武将の乗る馬として歴史にその

名を馳せた名馬である。

江戸末期、開国した日本にやって来た外国人にも、日本馬の中で最良の馬といわれた南部馬であったが、残念ながら昭和初期に絶滅してしまう。明治政府の方針で、大型の外国品種と南部馬など来種馬の掛け合わせによる馬の大型化をはかったためである。しかし、その血をひくドサンコは残った。

日本在来馬の種類

ここで日本在来馬の種類を挙げてお

こう。

馬の種類は、競馬や乗馬に使われる「軽種」、重量物の運搬などに使われる「重種」、乗用や軽い荷物運搬に使われる「中間種」、そして日本に古くからいる「和種」に分けられる。

この「和種」のことを「日本在来馬」とも呼び、現在国内に八種類生息している。与那国馬・宮古馬・トカラ馬・御崎馬・対州馬・野間馬・木曾馬として北海道和種馬である。この北海道和種馬がドサンコという愛称で呼ばれる馬だ。

特徴

ドサンコは、体高が低く、体の小さい割には荷物をたくさん運べる、運搬には最適の馬である。自動車の普及や道路整備が進んでも、山中での高圧鉄塔建設などで、ドサンコは荷物の運搬に大きな役割を果たした。

温厚で扱いやすく、持久力のあるドサンコは、今でも北海道在来馬として、農民生活を支えている。また側対歩（同じ側にある前後の脚をペアにして動かす歩き方）という反動のない独特の歩き方をするので、長距離を乗馬するホーストレーニングや障害者乗馬、さらに流鏑馬などの新しい分野での活躍も期待されている。

サラブレッドに比べて、ドサンコのずんぐりむっくりした体型は、何とも日本人に似た雰囲気を感じ、我々に親近感を与えてくれる。そんなドサンコが道内にはおよそ千八百頭いる。

若林 滋さん



ルーツ

私のルーツは福島県の会津。曾爺さんが庄屋をやっていたそうです。会津藩は明治維新で斗南に移され事実上の挙藩流罪になったわけですね。そういう中、明治三十年代の末に凶作が続き食べられなくなった。それで明治四十年、私の父が一歳ぐらいの時に父母に連れられて北海道の釧路に団体入植し、そこで父親は大きくなったわけですね。母は宮城県出身なので、私には伊達藩と会津藩の血が流れているということですね。

『北の礎』

幼い頃釧路に居たのですが、その時

元屯田兵のお爺さんがお二人いたんですよ。居住まいがきちっとしていて、子どもに優しく、非常に立派な人だった。そういうことで子どもの頃から屯田兵に関心がありました。

父親たちが戦後の農地解放で移った所が、土別の南公有地という屯田兵の共有地だった土地なんです。昔、「屯田兵と北風は避けて通れ」という言葉があったんですが、屯田兵は非常に颯爽としているわけです。国の軍人であり、一般の住民とは非常に違った存在で、畏敬の念があったんですね。だからいつの日か調べてみたいなあという気持ちを持っていた。それでたまたま北海道に来たものだから、まず屯田兵から着手し、『北の礎』になる

わけですね。

屯田兵について調べていくと、一般の入植者以上の苦勞をし、辛い思いをしたんだなあというのが分かりました。確かに土地を貰いお米を貰うだけども、自分の土地を三十年間は売買できない。自分の土地であって自分の土地ではない。そういう中で家族まで非常に厳しい軍律に縛られながら、北海道を開拓しに来たんだというのが分かり、これはもう開拓農家以上の苦勞をしたんだ、ということが分かったんですね。

『屯田学校』

屯田兵を見てもみると、彼らの大半

は元武士ですから、非常に教育熱心なんです。屯田兵として入植した後、いち早く学校を作って、子どもの教育を始めます。藩校教育の伝統なんですね。

屯田学校ではどういう教育をやったのかというと、「命を尊ぶ教育」をやったんですね。農業指導に力を入れていた。農業指導によって、植物や動物の生とか死というものを子どもの時から見つけて育つわけですね。言わず語らずのうちに「命を尊ぶこと」を学んだ。

今そういうことが全くなし。「命を尊ぶ教育」が机上での教育に終わっているもんだから、なかなか身につかない。そういう所に、日本の「命を尊ぶ教育」の限界があると思うんですよ。子どもが人を殺したり、人を傷つけたということを防ぐには、まず家庭と地域と学校が三位一体で子どもの頃から取り組まないで「命を尊ぶ精神」が育たないのではないかと、というのが、『屯田学校』の狙いだったわけですね。

『新たな北へ』

〜会津屯田兵の物語〜

会津も伊達も明治維新で敗北し、奥羽降伏人と呼ばれたわけですね。表向きは北辺防衛と奥羽降伏人の授産のため、北海道に入植させたというのが始まりですね。だけど僕に言わせれば、明治政府が危険分子を遠ざけたいという側面があったと思うんです。

明治開拓史の実態をよくよく調べてみると、負け組が過酷な北海道開拓を

担わされたということがいえます。最初は朝敵武士団、これ当然の負け組ですよ。同時に明治十年代の終わり頃、野幌の屯田兵あたりから盛んに官軍地域の貧窮した武士団が入って来ます。勝ち組の中の負け組です。その内に、食い詰めて北海道に来るしかない人たちが屯田兵募集で来るんですね。

それともう一つは囚人。自由民権運動の活動家が反権力闘争をやって捕まる。彼らも体制によって飛ばされた負け組。さらにタコ労働者というのがあった。日本史の正史は輝ける明治維新と一つことになっていますが、実態はこうだよということ、この『新たな北へ』会津屯田兵の物語を通じて訴えておきたいのです。

北海道のそういう開拓裏面史を知ることによって、薩長藩閥権力が弱者や敗者を疎外した、明治維新の真実の歴史が分かるのではないかと、この『新たな北へ』を考えています。

そついった北海道の開拓裏面史を書き残すのが、会津、伊達の血が流れている私の使命だと思っています。

若林 滋

わかばやし しげお

一九三四年釧路町生まれ。土別高校・東北大学卒。読売新聞入社仙台の東北総局に。昭和三十七年北海道に。札幌市政クラブ、道庁クラブのキャップ、報道課のデスクなどを務め昭和五十年東京本社に赴任。浜松支局長・人事部次長・編集局地方部長などを歴任。退職後、札幌に戻り読売サード（現ヨミックス）代表取締役社長。退職後、『北の礎』（二〇〇五年）『屯田学校』（二〇〇六年）『新たな北へ』会津屯田兵の物語（二〇〇八年）を出版。



植、タイプレスで印字された印画紙を切った、貼ったで版下作成をしていた。写真製版部門では、暗室カメラで網点画像フィルム作製し、版下を水平床式の製版カメラで撮影してネガフィルムにして画像フィルム、スクリーンフィルム（平網フィルム）などで集版して一枚の製版フィルムが作られていた。

当時から中西印刷は美術、書道の作品集等を数多く製作しており、特にモノクロ写真印刷の高品質には定評があった。今はモニターを見ながら濃度、階調を修正しているが、その頃は露光時間、ハイライト露光、マスクフィルムやドットエッチング（薬品で部分的に網点を調整する）で階調を補正していた。ここでもでも熟練職人の技術に支えられていた。八九年に暗室を撤廃してモノクロスキャナー、原寸カメラ、自動現像器等の導入で写真製版部は完全明室化。その後九四年DTPシステム、さらにCIP導入で完全デジタル化になり、フィルムはほとんど使用されなくなった。

昨今は、デジタルカメラで撮影されたデジタル画像データ入稿が頻繁になった。画像データをDTPシステムで編集し、フィルムを出力せずに印刷用の刷版がCTP（コンピュータ・プレート）で出力される。

一九七〇年代に分解網撮影が同時に可能になったタイレクトスキャナー、八〇年代には集版機能をシステムとして組み合わせたトータルカラーズキャナーが普及した。

現像されたフィルムを検証し、また所属していた写真サークルでは暗室に閉じ籠もり徹夜で撮影フィルムを現像、バライタ紙に露光し浮かび上がる画像を見て高揚していた。当時誰一人、フィルム不在の写真・印刷業界を想像することができなかった。まさに隔世の感を禁じ得ない。（K）

学生時代の三十年前を想起してみる。印刷画像工字のカラーズキャナー実験で、大日本スクリーンの初期に製造されたカラーズキャナーを使用していた。カラー原稿を円筒型のドラムに貼り付け、光で走査し透過あるいは反射の光を原色光に分色し光電管で光電変換、信号回路で増幅、

私が入社した一九八〇年は活版印刷とオフセット印刷が併設されていたが活版印刷の方が主流で文選工、植字工の熟練工の独壇場であった。写真は凸版写真版を垂鉛自動腐蝕機で作られていたが、その後感光性樹脂板に変わり、やがて活字が無くなった。オフセット印刷の組版は手動写

本書は、何といってもタイトルが秀逸。週刊文春で『私の読書日記』として連載中の二〇〇六年五月二十五日、著者の米原万里は卵巣癌のため、五十六歳の若さで死去した。米原は、一九九〇年のエリツイン大統領来日にあたって、随行通訳を務めたほどの国内随一のロシア語の同時通訳者であるが、エッセイストとしてもその非凡な才能を発揮した。私達には馴染みの薄い、ロシア語通

の行動力と財力をもって、巷に溢れる癌関連書籍を読みあさり、コレはと思う療法を次々と試していく。本来書評とは本の感想に過ぎないはずだ。しかし米原は、著者である医学博士を訪ね、納得するまで疑問をぶつけながら、その「最先端治療」を受け、「私には効かなかった。私が十人いれば、全ての療法を試すのに！」と叫ぶ。連載後半の書評は、自身の体を使って癌治療本の検証を

一冊気になる 紹介書 『打ちのめされるようなすごい本』

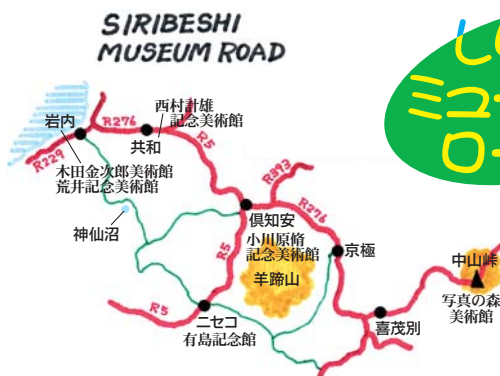
米原万里著
文藝春秋刊
定価二二八六円
（税別）
二〇〇六年
十月十五日発行



訳者としての経験談の痛快な筆致もさることながら、ジャンルを問わないう読書家である彼女の書評群から伝わる柔軟な精神と、ぶれない視点、牙を渡る舌鋒、その造詣の深さにはただただ脱帽。

ロシア語の通訳者は数が少なく、とりわけ、第一級の同時通訳者の彼女のギャラはとても高額だという。「打ちのめされ」ている自分に気づく。国家機密の飛び交う現場にいた著者に言わせれば「通訳料のほとんどは口止め料」であるそうだ。彼女はそれをまた読み返してしまっただ。（K）

BOOK INFORMATION

しいべし
ミュージアム
ロード夏は自然とアートが
同時に楽しめる

短い夏もそろそろ終わりに近づいてきて、過ぎやすい季節になってきましたね。今年の秋のテーマは決まりましたか？ おいしいものが食べたくなる食欲の秋。メタボを撃退!! 運動の秋。買ったはいけど読んでない本がいっぱい読書の秋。それぞれの秋がありますが、ドライブついでに行ってみよう。芸術の秋、なんていかがでしょうか。

「しいべしミュージアムロード」。喜茂別町「中山峠写真の森美術館」、倶知安町「小川原脩記念美術館」、ニセコ町「有島記念館」、岩内町「木田金次郎美術館」「荒井記念美術館」、共和町「西村計雄記念美術館」を結ぶルートはそう呼ばれています。大自然に囲まれゆくりでき、博物館・美術館を

巡ることで、お子さんの勉強にも役立つ、今回はそんなルートの紹介です。まずは喜茂別町「中山峠写真の森美術館」へ。ここは「道の駅・望羊中山」の隣にあります。道の駅とは連絡通路でつながっているのです、道の駅に寄りがてら美術館に行くことができます。手前に一般公募のギャラリー、奥には常設展示室があり、北海道の自然を捉えた写真を中心に展示しています。

次は「小川原脩記念美術館」。小高い丘の上にあり、広くゆったりとしたロビーからは羊蹄山が正面に見え、それだけでも贅沢な気分になれること受けあい。当日に限り美術館の半券で隣の倶知安風土館へも入場できるのも魅力。続いては「有島記念館」。ニセコで農場開放した謝恩の意味をこめ、また文学を始め多彩な業績を広く紹介するために開館されました。有島文学と広大な公園を堪能したら次に出発です。

道道66号線を岩内に向けて車を走らせる途中、神仙沼があります。遊歩道もあり、多くの湖沼や湿原を見て回れます。少し散歩して休憩をはさむのも良いかもしれません。

海を眺めてみましょう。岩内を描き続けた気持ちかわかる気がしてきます。その後は「荒井記念美術館」を回ってみましょう。館長の荒井利三氏が、有島武郎の小説の舞台になった、岩内に思いを込めて設立した美術館です。一号館・二階はピカソ美術館。所蔵する二百六十七点の版画の中から常時四十点を厳選し展示しています。二号館一階は生まれ出づる悩み美術館、二階は西村計雄美術館になっています。他にもホールがあり、芸術・文化に力を入れている美術館です。

さて、国道229号線まで戻り、そのまま左折し約四百mほど行くと、岩内町郷土館があります。時間があれば寄ってみるのも良いでしょう。その後は国道276号線を東へ向かいます。のどかな畑の中を走ると、最後の目的地、「西村計雄記念美術館」に辿り着きます。近づいてくると看板があるので、見落とさないように注意してくださいね。少し小高い丘の上に建っているのが美術館です。柔らかな絵に包まれたら、ドライブは終了です。丘の上からの夕日でも見ながら帰りましょう。ちなみに、国道との合流地点にある「かかし古里館」はおすすです。時間があたらせ寄ってみましょう。西村計雄記念美術館の半券があれば割引してくれます。

ガソリン代が高くてドライブなんてとても……という気持ちも分かりますが、秋の行楽の思い出に掛けてみてはいかがですか？

(W)

【失敗談】

文章でも会話でも同じですが、自分の体験を語るとき、相手や読者を最も退屈させるのは「自慢話」です。自分では自慢のつもりはなくても、他人にしてあげたこと、実績などをそのまま書いてしまうと、どうしても自慢話のように聞こえてしまいます。

そんなときはむしろ、そこまで至る自分自身の失敗や勘違い、あるいは登場する他の人の良いところ、自分が助けられた部分などを探して書いていくことです。文章にそれらを積み重ねてゆくと、

本づくりの
アドバイス
3

自然と自分の実績も見えてくるものです。人間は一人では何かを成し遂げることはできないもの。必ず誰かがサポートしてくれているものだからです。

漫才の「自虐ネタ」ではありませんが、失敗談といふものは読者にさわやかな共感を呼ぶものなのです。例えば『私が〇〇できたのは、なんといっても◇◇さんが、私の早とちりで消してしまったデータを、私の半分の時間で作り直してくれたおかげでした。』といった具合に正確に正直に表現することが、あなたの評価を高めることになるでしょう。



■編集部から 北京五輪で活躍した道産子アスリート。甲子園出場道産子球児。北海道出身者の形容として使われる北海道和種馬の愛称「ドサンコ」。今年、J1に復帰したコンサドーレの名もここから由来している。結びつける訳ではないが、コンサドーレも北海道経済も低迷している。今、あらゆる変化に対応できる柔軟さが求められている。大きな躍進を望むことは難しいが、大地を一步一步踏みしめ、堅実に歩み、確実に成長し続けることを期待する。過酷な北海道開拓を担ってきた開拓史の血が流れている道産子魂で！(K)

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL: <http://owl-online.jp>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二
●発行日／2008年8月20日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス！